

M-model | 地域になじむMサイズの建築。ビッグスケールにはなりえない大きさであるからこそ、日常の風景に溶け込むような建築風景を創出することを目指す。

M-model

プール

墨田区 スポーツ健康センター

カテゴリー

混成系 融合型

プログラム

建物モデル

海、土、水、光

敷地

墨田区 スポーツ健康センター

カテゴリー

混成系 融合型

プールという施設は水の大なまり場であるし、現象を同時起こす商業施設である。プールがもつ水面や壁の緑のイメージの風景を写映する建築を設計する。海、土と空、土の造形言語を融合して内部および外部空間を形成し「プールで泳ぐ」行為に連動する建築計画をした。屋敷の下面にはプールの水面が反映され、泳ぐ人の影やそれに伴う波による映像が内外部に投影される。施設が感覚的に応じて風景は異なる。中庭部分が埋め込まれるなかで内部プールとなり、壁には空と水の様子が映し出される。その異なるプールをつなぎその他機能を包摂するべく光のルーバーを壁に採用した。プールの風景と内部を光の壁でゆるやかに分類される。

水面が都市のなかに映り上がる。

水面に開かれ、光の庭園によって区別されている空間。

空に包まれた中庭のプール。

M-model

納骨堂

新宿区 東福院

カテゴリー

混成系 融合型

プログラム

建物モデル

海、土、水、光

敷地

新宿区 東福院

カテゴリー

混成系 融合型

納骨堂という施設で配座されるべきことのひとつに、距離感があると思われる。但世との距離感、生活感との距離感などにより、その他に人にとって眠る人、訪れる人にとって心地よくかつ遠く感を生まない距離感をつくることを念頭に設計を行う。自然環境のなかで距離感を生み出すものとして、少しだけ自然環境を生み出す土壌を選定した。納骨堂を海、土、水、光の環境に溶け込ませる。また海、土の建物構成により雨の日に様相は変化する。雨の日にこそあるいは礼拝によりふさわしい空間となるように計画した。

雨景のような佇まい。

日常と距離を置いて雨の風景に包まれる礼拝堂。

雨の日に、風景は一変する。

M-model

集合住宅

世田谷区 羽根木の森

カテゴリー

スケール拡張型

プログラム

建物モデル

海、土、水、光

敷地

世田谷区 羽根木の森

カテゴリー

スケール拡張型

現代における集合住宅に見られる解ける部屋の配列を、森がもつ垂直及び水平方向の場所性や距離感の近い集合の形に転用する。森、土の5センチメートルから拡張し、垂直方向に各住戸の居住空間を転用した。住戸は森のなかの距離と距離感のなかで距離感を生み出すものとして、少しだけ自然環境を生み出す土壌を選定した。納骨堂を海、土、水、光の環境に溶け込ませる。また海、土の建物構成により雨の日に様相は変化する。雨の日にこそあるいは礼拝によりふさわしい空間となるように計画した。

森とつながるものが都市に現れる。

森に上って住まわれる計画地帯住戸。

L-model | 地域に対し大きさのある施設の計画。生活から都市風景へとまたがるスケールの可能性を探る。

L-model

図書館

台東区 中央図書館谷中分室

カテゴリー

混成系 融合型

プログラム

建物モデル

海、土、水、光

敷地

台東区 中央図書館谷中分室

カテゴリー

混成系 融合型

図書館の都市における存在は、蔵書をする機能と図書館の機能、それに地域の憩いの場である。蔵書をするのは日光を遮り温度環境を一定に保つことが必要であるが、地下空間にそれに適している。そこで本を海底に沈め保管しつつ、利用者は草原で憩いながら蔵書を楽しむ環境を計画した。俯瞰してみると草原に中の活のような様相を呈する。防災広場でもある地上部分は、公園のような場所となるように図書館は象徴としての姿を消され、機能に合うようなランドスケープのような、新しい地域の図書館風景を提案する。

都市のなかに埋め込まれる図書館と公園。

俯瞰としての開放・読書スペース

L-model

商業施設

渋谷区 表参道ヒルズ

カテゴリー

混成系 融合型

プログラム

建物モデル

海、土、水、光

敷地

渋谷区 表参道ヒルズ

カテゴリー

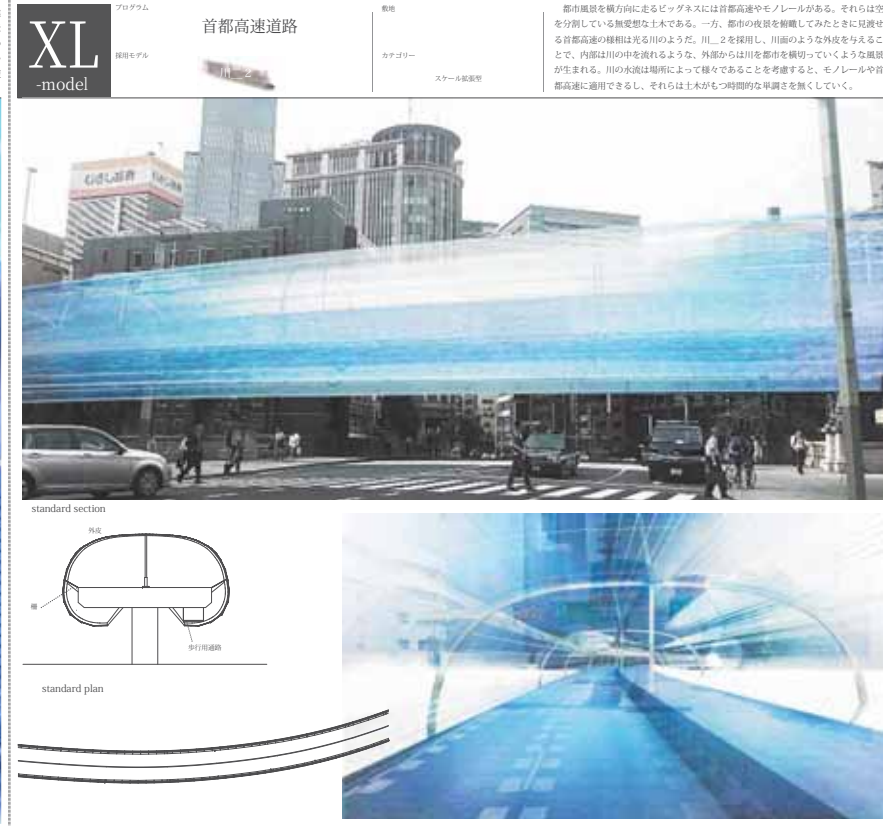
混成系 融合型

現代の都市における中規模、大規模商業施設の特徴のひとつに、外部への視線を通さない内部の完結性と最大限のレンタル比で確保された店舗ベースの並列にある。閉じた均質性が前提となる構成は霧のようであるともいえる。そこで商業施設全体を霧のような空間に見立て計画した。利用者（消費者）はやがて霧の中に取り込まれ、自分の場所を見失いながらも消費活動を行おう。店舗はラウクラと設えるのではなく縫い込んだ空間のなかで不思議な魅力を醸成しながら、個性を出していく。

立ち上り消えていくような外観。

どこまでも等質だと、少し異なり続ける内部空間

XL-model | 都市のビッグネスを、大きな自然風景のような存在と見立てる。



第5章 メタボリズムしていく自然風景

00 SCENERY METABOLIZING

S-XLmodel が様々な匿名の敷地において建築化されていくとき、都市風景はゆるやかに変革していくだろう。建築が様々なスケールを横断しながら積極的に「風景化」していく点に特徴がある。

本研究では自然風景をその手がかりにしているが、それらのもつ意義は特に以下の3項目に考察された。

01 現実性

具体的手法を実例から学びとしていることや、小規模な敷地をも対象となることから、比較的に理念を現実化するハードルは低くなっている。理念を理念で終わらせず、社会実装をすることを現実的に目標としている。

02 更新性

対象敷地を東京都内に設定したことは、未だに新陳代謝は活発であり風景が更新されている。自然風景のような建築がそのサイクルの中に並び込み、少しずつ都市風景を建築が刷っていく可能性は十分に残されていると考えられる。

03 汎用性

自然風景の概念化を本研究では主観的考察をベースにし、具体的手法は定着化される指標とビジュアル化の方法を採った。そうした主観的観察や定着化を促す方法は、個人の多様な観点を受け入れながら発達していくことができるため、現代の情報化社会との親和性は保たれると考えられる。



00 はじめに

私は都市風景と建築の関係性に興味があります。都市風景をつくりだすのは建築や土木の集積の結果であり、時間のなかで変化していくのですが東京の風景はなかなか変わらない。建築そのものの建ちあがり方を今までは異なる視点で再考することが、都市風景を変化（最適化）させていくひとつの方法なのではないかと考えています。

自然風景のメタボリズム概念図

東京の風景は相変わらず高度経済成長期の延長戦が続いているように思われる。経済論理と大資本の基に行われる都市計画（トップダウン）ではどうもヒューマンスケールのある計画は難しい。しかし日本の都市は新陳代謝が激しく建築の更新性は早いという背景をもとに近年はボトムアップ式に小さな建築風景から見直しを始める動きは多い。

それに近い思想がかつて行われた「メタボリズム」運動は建築そのものが更新され時代にに応じて縮小拡大される可能性を示したもののだが、建築躯体を更新することの現実的なハードルの高さが仇となり撤退を余儀なくされたと考えられる。

今日は塚本由晴や北山恒などの建築家が「ヴォイド・メタボリズム」と呼称される、東京特有の建物の隙間＝ヴォイドをゆるやかに紡ぎ、均質な都市風景を心地よい空間に最適化させていく思想が垣間見れる。

01 自然風景のような建築 を都市へ

ところで、自然風景は以上に考察されたメタボリズムの要素（自己更新性、隙間、均質ではないこと）をもともと内包している存在、概念である。本研究では自然風景のような建築が都市に配置されていったとき、都市風景はどのように変革されていくか、という観点で考察してみたい。具体的な考察は第5章に記述。

02 「1敷地に1建物」⇒「1敷地に1自然風景」

現行の制度に則るとき、1敷地にもたらされるのは1建物から1自然風景へと捉え方がシフトされる。1敷地ごとにゆるやかに自然風景は生まれていく＝メタボリズムしていく。

自然風景のメタボリズム概念図

03 建物利用を一義的から多義的へ

現在はプログラムの制約が強くそのまま建物の利用の仕方も決定されているが、自然風景はどのように利用するかは自由である。原っぱは時に公園になり、時に集会所になり、時にピクニック広場になる。そういった使い方の慣用性を建築にもたせたい。都市風景は利用する人々の姿によっても更新＝メタボリズムされていくだろう。

自然風景のメタボリズム概念図

風景のメタボリズム